量子唯識仮説：意識と現実の新たな解釈モデル

河野 克典*，新田 崇信**

Quantum Yogācāra Hypothesis: A New Interpretative Model of Consciousness and Reality

Katsunori KAWANO*and Takanobu NITTA**

*横浜国立大学 豊穣な社会研究センター つながり方研究所 所長
**大慈山 佛心寺 慶應義塾大学大学院 SDM 研究所 研究員

要旨 量子唯識仮説は、量子力学の概念と仏教の唯識思想を融合させた新しい意識と現実の解釈モデルである。この仮説では、観察者(A)は実体を持たず($|A|^2 = 0$)、経験(A^c)のみが実在すると考える。知覚される世界(U)は経験との相互作用によって現成され($|A^c|^2$)、コミュニケーションは経験の重ね合わせとして理解される。この仮説は、自己と他者の境界の曖昧さや、故人との対話の可能性など、独自の視点を提供する。また、ファン・ヘネップの通過儀礼論と組み合わせることで、新たな儀礼のデザインにも応用できる可能性がある。量子唯識仮説は、意識と現実の関係性について新たな解釈を提示し、従来の哲学的・科学的パラダイムに挑戦する試みである。

キーワード ： 量子唯識仮説、意識と現実、観察者、現実の生成プロセス、死生観

1. はじめに

量子唯識仮説は、量子力学の概念と仏教の唯識思想を融合させた新しい意識と現実の解釈モデルである。この仮説では、観察者(A)は実体を持たず($|A|^2 = 0$)、経験(A^c)のみが実在すると考える。知覚される世界(U)は経験との相互作用によって現成され($|A^c|^2$)、コミュニケーションは経験の重ね合わせとして理解される（Fig. 1）。

この仮説は、自己と他者の境界の曖昧さや、故人との対話の可能性など、独自の視点を提供する。特に、故人との対話については、生前の経験や思い出を通じて故人を「再生」させる可能性を示唆する。

さらに、ファン・ヘネップの通過儀礼論と組み合わせることで、新たな儀礼のデザインにも応用できる可能性がある。これにより、理論的な仮説を実践的な応用へと発展させ、現代社会における儀礼や死生観の再構築に寄与することを目指す。

2. 理論的背景

2.1 量子力学の基本概念

量子力学は、観測による波束の収縮、重ね合わせの原理、量子もつれなどの概念を通じて、観察者と観察対象の関係性に新たな視点を提供してきた。特に、観測行為が量子状態に影響を与えるという考え方は、意識と現実の関係性を考える上で重要な示唆を与える。

2.2 唯識思想の核心

仏教の唯識思想は、意識のみが実在するという考えを中心に据えている。特に、阿頼耶識の概念や空の思想は、個人の意識と外界の関係性について深い洞察を提供している。

Fig. 1 量子唯識仮説を表す式

3. 量子唯識仮説の主要概念

3.1 観察者と経験の関係

量子唯識仮説では、観察者(A)は実体を持たず($|A|^2=0$)、経験(A^c)のみが実在していると考える。これは、私たちが「自己」と呼ぶものが実は経験の集積に過ぎないという唯識思想と一致する。

3.2 現実の生成プロセス

私たちが知覚する世界(U)は、経験(A^c)との相互作用によっ

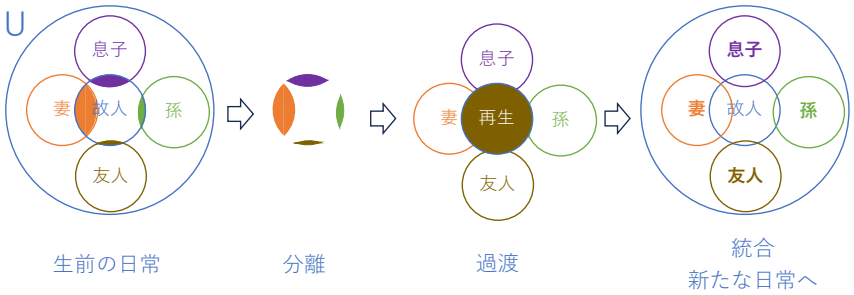

Fig. 2 ヘネップの通過儀礼に合わせたメカニズム

て現成される($|A^c|^2$)。これは量子力学における観測の役割と類似しており、観察者の経験が現実を形作るという考え方を示している。

3.3 コミュニケーションの本質

異なる観察者間のコミュニケーションは、それぞれの経験の重ね合わせとして理解される。例えば、Aさんとbさんが同じ景色を見ている場合、両者の経験が重なり合うことでコミュニケーションが成立すると考える。

4. 量子唯識仮説の応用

4.1 死者との対話

量子唯識仮説は、故人の存在をその人との思い出や経験の集積として再構築する可能性を示唆する。亡くなった人の情報はアップデートされないが、生前の経験や相互作用は残り続けると考える。

4.2 自己と他者の関係性

この仮説では、自己と他者の境界が曖昧になり、すべての存在が相互に連関しているという見方を提供する。これは、個人の意識が独立して存在するのではなく、他者との相互作用の中で形成されるという考え方を支持する。

5. 儀礼のデザインへの応用

量子唯識仮説は、ファン・ヘネップの通過儀礼論と組み合わせることで、新たな儀礼のデザインに応用できる可能性がある。

5.1 ファン・ヘネップの通過儀礼論

ファン・ヘネップは、通過儀礼を以下の 3 つの段階に分類した：

分離：日常から離れる段階

過渡：曖昧な中間的状態

統合：新たな日常への移行

5.2 量子唯識仮説に基づく儀礼のデザイン

量子唯識仮説とファン・ヘネップの理論を組み合わせることで、以下のような儀礼のデザインが可能となる：

分離段階：参加者が故人との思い出を語り合い、生前の経験を抽出する。

過渡段階：抽出された経験を混ぜ合わせ、故人の存在を再構築する。

統合段階：再構築された故人からのメッセージを受け取り、新たな日常への移行を促す。

このプロセスにおいて、生成 AI を活用することで、故人の思考や言葉をより効果的に再現できる（Fig. 2）。

6. 哲学的・倫理的含意

量子唯識仮説は、以下のような哲学的・倫理的問題に新たな視点を提供する：

- 自我の虚構性：観察者の実体が空であるという考えは、固定的な自己の存在に疑問を投げかける。
- 現実の主観性と客観性：経験による現実の生成プロセスは、客観的現実の存在に再考を促す。
- 死生観への影響：故人との継続的な関係性の可能性は、従来の死生観に変革をもたらす可能性がある。

7. 結論

量子唯識仮説は、量子力学と仏教哲学を融合させることで、意識と現実の関係性について新たな解釈モデルを提示する。この仮説は、自己と他者の関係性、現実の生成プロセス、そして死者との対話の可能性について独自の視点を提供し、従来の哲学的・科学的パラダイムに挑戦する。

8. 参考文献

1. ニールス・ボーア『原子理論と自然現象の記述』
2. 世親『唯識三十頌』
3. アルノルド・ヴァン・ジェネップ『通過儀礼』

9. 謝辞

本研究を進めるにあたり、日本グリーフアカデミーの皆様には多大なるご支援とご協力を賜りました。特に、グリーフケアに関する深い知見と実践的なアドバイスは、本研究の基盤となりました。ここに心より感謝の意を表します。

【問合せ先：info@comac.jp】